2018年11月25日

中野教会：「聖書の学び」

　　　　　　　　　　　　　**「マラキ書：主イスラエルを愛す」**

聖書箇所：マラキ書1:2-5、2:17-3:1、4:4-6

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日はマラキ書です。十二小預言書の最後であり、旧約聖書の最後の文書になります。十二小預言書はホセア書で始まりマラキ書で終わりですが、大体成立順序に並んでいます。マラキ書には他の預言書にあるような、預言された時期を示す言葉はありません。しかし、内容的に考えてバビロン捕囚されたユダヤ人がペルシャ王クロスによって帰還を許され、神殿再建をし、そこにおける礼拝をユダ族の宗教の中心としたユダヤ教成立後の時期と推定されます。BC430年代にネヘミヤの宗教改革がありますが、マラキ書に描かれている宗教事情は聖書記者から見て褒められた状況ではありませんので、その宗教改革の波も収まり、別の意味での堕落が始まっている社会と考えられます。従って、BC400年前後と推定されます。マラキ書の直前の預言書ゼカリヤ書の時代即ち宗教改革の時代から百数十年ほど経ている時期ということになります。

その頃の政治的状況を簡単に見ておきます。伝統的に、パレスチナの地は北にはペルシャ、南はエジプトという大国に挟まれ翻弄されてきましたが、この時期エジプトはあの勢力を誇ったネコ帝の第26王朝が滅び、まだクレオパトラのプトレマイオス朝が登場する前であり、パレスチナに勢力を及ぼすことなど全く無理でした。パレスチナの地は一応、バビロニア帝国を破ったペルシャ帝国の支配下にありました。「総督」が派遣されパレスチナを統治していました。マラキ書の時期は、ペルシャはダレイオスII世の治下であったと推測されます。しかし、マラキ書の100年前くらいからペルシャはギリシャの台頭に悩まされマラトンの戦いを始めとした戦争をしています。マラトンの戦いはマラソンの起源になった戦争ですがギリシャが勝利し、ペルシャのヨーロッパ進出を抑えました。その後戦いが何度かあり、BC449年、両者は和解しました。ダレイオスII世はその後の王です。ペルシャ/ギリシャの争いはカナンの地には直接の影響はありませんでしたから、マラキ書の時代は比較的平和な時期であったと推察されます。ユダヤ人のエジプトへの植民活動が盛んであった、ということや、日常用語のアラム語化が進行していたことなどが言われていることです。かつての2大国がそれぞれ疲弊して、その結果、両王国の中間にあるカナンの地は一時的な平和があった時期です。宗教的情熱は失われていた状況と推測されます。今の日本と似た時期であった、と言えます。

マラキ書ではこのマラキの素性を推察できる記事はありません。また人名としてはほかになく、これは人名ではないのではないか、という説もあります。3:1に主なる神が「わたしの使者を遣わす」と言われますがその「私の使者」は「mal-a:ki:」です。ここから文書の名前が取られたのではないか、と推測されます。しかし、他の預言書の文書名は預言者の名前を冠していますので、マラキという名の預言者が居たと考える方が素直なように思います。とにもかくにも本文に入って行きましょう。

2節の最初は「「わたしはあなたがたを愛している」と主は仰せられる」です。内容は説明の必要ありません。主なる神がイスラエルを愛している、というのです。私たちは新約の下での新しきイスラエルですから、「主なる神が私たちを愛している」と真っ先に宣言しているのです。「聞け、イスラエル」ではじまるシェマーというイスラエルの祈りの典型的なものがありますが、そこで述べられているのは「心を尽くし、精神を尽くして、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」です。申命記6:5です。人間が神を愛する、です。マラキ書では、人間が「神を愛する」ことについては触れて居ません。このあとのマラキ書の記述をみるととてもイスラエルは神を愛している、とは思えません。しかし、マラキ書ではイスラエルの状況を見る前に、まず先頭で「わたしはあなたがたを愛している」と言われているのです。新約とか旧約という時の「約」は「契約」の約だと言われます。契約と言うと神と人間が契約をした、と思われがちですが、聖書に言う「契約」は基本的には神からの一方的なものです。人間には拒絶する自由は与えられていますが契約内容を提案する力はありません。むしろ契約、というより、神様からの一方的「約束」と理解した方が良いように思われます。その主なる神が一方的約束として「わたしはあなたがたを愛している」と言われているのです。“あなたがたがシェマーで命じられたように私を愛することがなくても「わたしはあなたがたを愛している」というのです。これが新約での福音に繋がっています。マラキ書ではイスラエルの、主なる神への不信が繰り返し、繰り返し述べられます。実にそれでも「わたしはあなたがたを愛している」というのがマラキ書の中心的メッセージです。

主の「わたしはあなたがたを愛している」との言葉に対し、イスラエル人は「どのように、あなたが私たちを愛されたのですか」と反応します。“「愛されている」というのは本当かな？よく解からいのですが。決められた祈りも奉げているし、いけにえ、も献上しているから神様から文句を言われる筋合いはないとは思うのですが、神様が私たちを愛するってどういうことですか”、と言うのです。これはヘブル語の「ma:」という「何、どうして、なぜ」という意味の語に前置詞の「be」が付いたもので英語では「in what?」（どのように、何によって？）の意味です。このような、主なる神に対しうそぶく態度はマラキ書にしばしば出てまいります。1:6には祭司たちが「『どのようにして、 私たちがあなたの名をさげすみましたか』」と言うのがでてきます。“神様に対し敬意を払っているはずですよ”と言っています。また1:7では祭司たちが「『どのようにして、 私たちがあなたを汚しましたか』」と言っています。“主なる神をけがすなんてしていないはずですが”と言っているのです。このような、斜に構えたような、ことばはこのあとのマラキ書にも何度もでてきます。神の正義とか真理の道、というようなことに真正面から考えないのです。“そのようなことはちゃんとやっているはずです。なにが問題なのでしょう”という態度です。義務は果たしているはずだから、とやかく言われる筋合いはない、というのです。先ほどの時代背景から言ってユダヤ教社会は一応確立し国家祭儀としてヤハヴェ宗教は出来上がっていた、と思われますが、この平和な時に信仰の情熱は失われ、国としての宗教が信仰にすり替わっていたと考えられます。宗教的にはちゃんと義務を果たしているようにみえますが、神を信じ、神に信頼し、希望を置く、という信仰の本来のものは忘れ去られてしまっているのです。このようなことは宗教の歴史にはしばしばでてくることです。私たちの信仰姿勢にもこの安易な気持ちが支配していないか常に振り返ってみる必要があります。かつてのキリスト教社会もこのような状態に陥り、宗教改革の覚醒がありました。個人としても信仰の覚醒を与えてくれる場に自らを置くことが時々求められます。

このユダヤ人のうそぶく態度、しらけた反応に対し、神様はエサウとヤコブの物語を思い起こさせます。この物語は、神の選びは人間の理解を超えるものだ、ということを示しています。エドム人はエサウの子孫とされています。死海の南の地です。主なる神は長子エサウではなく、御世辞にも善人とは言えない弟ヤコブをイスラエルとして選ばれた民とされた、という物語です。一点注意ですが、3節の「エサウを憎み」と訳されている「憎み」は感情的な憎しみ、とは別の事です。ルカ14:26でイエス様が「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません」とおっしゃられた時の「いのちをまでも憎む」の「憎む」です。ヘブル語では「sa:na:」と言う言葉ですが、これらの場合は「低い価値とする」という意味と理解するのが妥当です。神様は、エサウを低い価値とし、ヤコブを選んだのです。その理由は解りません。神の選びはこの世の常識を越えた出来事です。とにかくエサウに代わってヤコブが選ばれたのですがヤコブの方が優秀だからと言う訳ではなくむしろより大きな問題をもった子であったから、と考えるべきです。イスラエルの主なる神が働かれるのは問題多いところにあってなのです。そもそもイスラエルの民が選ばれたのも政治的にも社会的にも実に大きな問題のある地に問題ある民が入れられたのです。5節にあるように主なる神の選びの力の証明するために、問題多い地が選ばれたのだ、と解釈できるかもしれません。教会は大変問題の多い場所だ、といわれることがあります。問題を抱えた人が救いを求めて教会に来たのですから、ある意味で世の中一般より問題が多いのは当然と言えます。そのような問題多き所にこそ、主なる神が働くのです。皆が、平然と、力強く歩んでいるのであれば、神様は「放置」しておくような気がします。

6節以下1章の最後まで当時のユダの人々のしらけた態度のことが繰り返し描かれます。12節以降では、主なる神へのささげものについても、一応規則通りには行うけれども、こころからささげものではないので主なる神は喜ばれず、むしろのろわれる、といわれています。13節で「なんとうるさいことか」と言って信仰をむしろ、面倒なことにしています。この形だけは守るけれども心からの宗教ではないことが2章以降にも続き繰り返し、マラキは批判します。妻を離婚したらダメ、というのはなぜか、と言う、また「裁きの神はどこにいるのか」と言い、信仰を煩わしいものと感じたり、しています。「主なる神に立ち帰れ」と言われれば、どうやって帰るのか、などとうそぶきます。十分の一税を守らない、ということは盗人のようなものだが、主なる神に「いつ、神のものをぬすんだでしょうか」と知らぬ顔をしている、ということも挙げられています。ついには、3:14で「神に仕えるのはむなしいことだ。 神の戒めを守っても、 万軍の主の前で悲しんで歩いても、 何の益になろう。」というまで不信仰の言が示されています。

当時はペルシャの支配下にあるにしても、ペルシャは力を失ってきており、イスラエルの地は、事実上、自立的な小国の集まり、のような、あるいみで平和な時でした。社会の緊張感、躍動感はなく、けだるい雰囲気が漂っていたのではないか、と思います。このような時代にはくそまじめ、ははやりません。信仰と言うことを真剣に問うようなことは忘れられ、形だけは祭儀を守る態度でした。最小限の宗教的慣行は守り、それで良しとしていたのです。言葉はかるくなり、こう言っているからいいじゃない、といういい加減な態度がまかり通ります。どうも日本の現状を見ているような気になって、落ち着かない気分です。私たち、の日常生活においてもこの波が押し寄せ、日本人の良き点として「無宗教」が語られる現状です。言葉の軽さ、については今の日本の政治家がその代表例を示しています。日本の首相の「侵略戦争への反省」「慰安婦に関する反省」など誠意の感じられない談話には辟易とします。反省と言っているし、お金を払ったのだから、もういいじゃない、未来を語ろう、などと言ってごまかしています。被害を受けた方はそうはいかない、のは当たり前です。イスラエルの信仰は激しい、ところがあり、信ずる、愛する、という一つ一つに生涯をそれに掛ける厳しさを求めています。うそぶくような態度より、ヨブのように神に挑戦するようなことのほうを評価します。このような信仰に対するスタンスは新約においても同様です。主イエスは罪の贖いのため、命を奉げたかたですが、弟子達にも、福音伝道のために、生涯をささげることを求めました。その典型的例がパウロです。どうも日本人は「中庸を旨とすべし」という意識があって、このような激しさに抵抗を覚えます。つきつめたがらないのです。しかし、キリスト教においても常に、極端が良い、と言うものでもありませんから、日本人の心に染み入るキリスト教というのは単なるユダヤ的伝統以外の所に見出されるのではないか、と感じています。しかし、「不誠実な態度」は100%ダメです。

のろい、という言葉がしばしばでてきますので、このことばについてちょっと述べておきます。「のろわれる」「のろう」「のろい」等の言葉で新改訳聖書を検索しますと150回以上の出現回数です。旧約聖書にはもっと沢山あります。マラキ書1:4に「主のとこしえにのろう民」という表現がでてきます。この「のろう」はヘブル語で「za:am」「怒る」と言う意味の言葉です。「のろう」と訳されるのはむしろまれな言葉です。「怒り、恐れ」の意味です。この箇所は直訳すると「主がとこしえに怒られるところの民」となります。次に1:14に「これをささげると誓いながら、 損傷のあるのを主にささげるずるい者は、 のろわれる。」とあります。ここでののろわれる、は「a:rar」という言葉であり、日本語の「のろう」に近い意味合いです。この世の事柄として「あんなやつひどいことになってしまえ」というときの「のろい」です。このあとも2:2に、変化形を含め、三度「のろい」が出てきます。これも「a:rar」です。更に3:9に十分の一税と奉納を心こめてきちっと実行しない者たちをさして「のろいを受けている」と言っています。これも「a:rar」の名詞形です。注意しなければいけないのは日本語の「のろい」のように魔術師じみた意味合いはほとんどなく、神の恵みから一切排除されていることを指しています。実はマラキ書にはありませんがもうひとつ「のろう」と訳される言葉があります。「ka:lal」ということばです。レビ記21:17に「自分の父または母をのろう者は、必ず殺されなければならない」とありますが、この「のろう」が「ka:lal」で「侮辱する」という意味合いです。「神を侮辱する」のは大罪であり、死刑に値することになっています。父母を侮辱するのも「神を侮辱する」のに準じた扱いです。更にもう一つ、マラキ書の4:6に「わたしが来て、 のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ。」とあります。これは「he:rem」という言葉です。新改訳聖書ではほとんどが「聖絶」と訳されている言葉であり、命が絶たれること、即ち滅びを意味します。「za:am」（神の怒りののろい）、「a:rar」（神の恵みから排除されるのろい）、「ka:lal」（侮辱する、軽んずる、ののろい）、「he:rem」（永遠の滅びののろい）の4種類があります。新約聖書で「のろい」が出てきたとき、ヘブル語ではどれに該当するのかよく考える必要があります。この「滅亡」と同義の「のろい」が新約の「のろわれよ」の言葉に繋がるところの一番問題の「のろう」です。

この「he:rem」ののろいはマラキ書の最後のことばで出てきますが、新約聖書では第一コリント16:22「主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。主よ、来てください。」というところで使用されています。ギリシャ語では「anatema」で後に中世キリスト教教会では破門を意味する言葉として使われました。中世キリスト教社会では破門される、ということは警察による保護はなくなりますので、おいはぎにあってもだれも助けてはくれず、野垂れ死にの運命に定められる、ということを意味していました。「救いは教会によるのみ」という教理の極端な適用です。第一コリント12:3にある「イエスはのろわれよ」ということばもヘブル語訳では「he:rem」です。あと黙示録22.03の「もはや、のろわれるものは何もない」と言う時の「のろわれるもの」も「he:rem」です。主イエスは人間のために自己犠牲をした偉大な人、というのではなく、肉体的のみならず霊的にも滅亡・破滅のところにまで追いやられた、ということなのです。だれがそんなことをしたのでしょうか 、私であり、あなたである、というのが聖書の言っている事なのです。神が、私たちの罪の行き着く先をこのように主イエスにおいて示されたのです。

2:1-10には当時の祭司たちやイスラエルの民の信仰心の低下や、信仰共同体としてのイスラエルの崩壊が語られています。ここでもまた、あのうそぶく態度や、白けた感じがあります。「さばきの神はどこにいるのか」と神の力を否定する言葉もつぶやかれています。

これに対する、神様の答えが3:1です。お読みします。「「見よ。わたしは、わたしの使者を遣わす。 彼はわたしの前に道を整える。 あなたがたが尋ね求めている主が、 突然、その神殿に来る。 あなたがたが望んでいる契約の使者が、 見よ、来ている」と万軍の主は仰せられる」と言われています。「あなたが望んでいる」というのはこの前の文脈からして皮肉に聞こえます。私の使者とか契約の使者と言われているのが誰かは述べられていません。ユダヤ教の正統派ラビはいずれもエリヤを指していると解釈しているようです。イエス様はバプテスマのヨハネを褒める時、ここを引用しています。2章の「契約」の言葉が挙げられていること、とのつながりで考えると、ここで「契約の使者」と言っているのはモーセと神様のシナイ契約と関連はないのか、と思わさせられます。イギリスの保守派神学者ジョイス・ボールドウィンがその可能性を指摘しています。出エジプト記3:3には神の山ホレブで「主の使い」が現れたと記されています。マラキ書に言う「契約の使者」とはシナイ契約に代わる新しい契約を携えて来る使者なのではないか、と言うのです。がぜん、賛成したくなります。福音書にあるバプテスマのヨハネを指すとのイエス様の説明も「心は」イエス様ご自身のことを指している、と解釈もできるでしょう。マラキ書における「わたしの使者」は実は「わたしの子」である、とも考えられます。新しい契約を齎したのはヨハネではなく主イエスご自身だからです。しかし、このように理解するにしても旧約聖書での「神の使者」の用法は神ご自身ではないことは心得ておくべきです。「わたしの使者」という言い方は一般的な「神の使者」とは異なる、と言わねばなりません。新改訳聖書で「わたしの使者」で調べるともう一か所あります。イザヤ44:26です。ヤコブに対する主の祝福の約束の中で「わたしのしもべの言葉を成就させ、わたしの使者たちの計画を成し遂げさせる」とあります。「わたしのしもべ」は預言者、「わたしの使者」はイスラエル信仰に忠実な王を指している、と解釈できるでしょう。ここでの「わたしの使者」は複数です。マラキ書の「わたしの使者」は単数です。イザヤ書での預言者でありかつ王である一人の人を指し示している、と言えるのではないかと思います。それはメシア待望としてその後の400年ほどの時代の民衆信仰として沈潜していくのです。

3:2以降には、実は形だけの宗教的態度であり、神の喜ばれるところではないイスラエル、ユダの様子が語られます。しかし最後に「万軍の主は仰せられる」としたあと、祝福の言葉が現れます。3章の最後では「わたしが事を行う日に、わたしの宝となる。 人が自分に仕える子をあわれむように、 わたしは彼らをあわれむ。/あなたがたは再び、正しい人と悪者、 神に仕える者と仕えない者との違いを 見るようになる。」との神の言葉があります。文の流れから言うと大逆転です。実は、この逆転の前のところで、底流に流れていた、1:2の「わたしはあなたがたを愛している」という言葉が噴出しているのです。「主のみ名を尊ぶ者」が永遠の救いの入れられる者を記録する「記憶の書」に記されることが起きたのです。このようなユダ、イスラエルの民を主は、いかなる状態にあろうと「わたしはあなたがたを愛している」と言われるのです。このような大逆転は、全能の神に対する徹底的な信頼と、神への希望の確信によってもたらされます。

　4:1-3節は「その日」即ち主の日の描写です。「義の太陽が上り、/その翼には、いやしがある」という表現は珍しい表現です。「義の太陽」という言い方や太陽を翼に譬え、いやしのとしての主の日を述べているのはここだけです。中東の記念碑には太陽を翼に譬えた絵があるとのことですのでその影響かもしれません。このイメージは仏教の大日如来の日輪にまで繋がっている、という説もあります。大乗仏教の成立時のキリスト教やゾロアスター教の影響は十分ありうることです。3節ではこの日には、主が事をおこない、悪者どもを踏みつけさせる、と言っておりこれは自分で復讐はする必要はない、またはするな、と言っているのでしょう。4節以降は最後のまとめです。「記憶せよ」が英語でrememberであり、思い起こす、の意味もあります。ホレブというのはシナイのことです。5節では主は最後の日の前にエリアを送る、と言われています。エリアは第二列王記2:11で「たつまきに乗って天に上って行った」と言われており、エノクと同様死を経験していない人物とされていました。マラキ書が書かれた時代に既に再来する、との伝承があったのかもしれません。いずれにしろ、マラキ書のこの主の言葉「預言者エリヤをあなたがたに遣わす」はメシア来臨の前にエリヤ再来する、との希望を定着させました。マタイ福音書11:10-14を見ると、マラキ書3:1の「契約の使者」、エリア、バプテスマのヨハネがイエス様によって同一視されています。他方、エリア再来はイエス・キリストの来臨のことと噂するむきもあったようです。そして最後6節に父と子の関係が復活するように神様と人間の関係を取り戻しなさい、と勧めています。新改訳では「それは、私が来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ」となっていますが。ヘブル語語順に忠実に訳しますと、“そして、私は来て打たない、この地を、破滅で。”となります。この破滅は「he:rem」であり、動詞形が先述の「のろう」のひとつ「ha:ram」です。新改訳ではこの「へ―レム」に対応する訳が「のろいで」と「滅ぼす」の二重に訳されています。マラキ書で「he:rem」が使用されているのはここだけです。新旧聖書のラテン語訳というのが4c頃にできますが、それにはギリシャ語の「アナテマ」がそのまま使用されています。BC3c頃の七十人訳と言われる旧約聖書のギリシャ語訳では「へ―レム」は訳出されていません。これらのことから考えると、少なくともマラキ書の段階では「アナテマ」即ち「呪われよ」の意味はなかったのではないか、と想像されます。いずれにしろ最後の語が「he:rem」で終わると言うのはあまり気分の良いものではないことは事実です。そのため、ギリシャ語訳は、最後に4節を繰り返し、ユダヤ人が会堂で使用するヘブル語聖書は5節を繰り返す、ということをしています。日本語訳は原文に忠実です。むしろ、破滅に追いやることをしないため、神様と人の関係を修復しなさい、という悔い改めのメッセージですから、新約でのバプテスマのヨハネの第一声「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」に繋がって行く、とも解釈できます。

　マラキ書を全体として見てみました。このようなユダ族の白けた感じは今の日本の状況に似ているように思われます。しかし、繰り返しになりますが、これらすべての上に、「わたしはあなたがたを愛している」という主の言葉が厳として存在していることを心に刻みましょう。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日の祈りと学びの時を感謝致します。旧約聖書の最後の文書であるマラキ書から私たちのすべてに先立って「わたしはあなた方を愛している」とおっしゃられている方に感謝申し上げます。神様は「わたしの使者を遣わす」と約束されました。私たちはその使者のあとに連なる者です。どうぞ私たちを喜びの声を述べ伝える者とさせてください。我らの救い主、イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン）